

新収資料の展示の目的と課題

—平塚市博物館の場合—

The Exhibition of Newly-collected Material in the Hiratsuka City Museum

小川直之※
Naoyuki Ogawa

はじめに

平塚市博物館は開館してようやく1年目を迎えた。現在、館蔵資料は約4万5500点（1次資料約3,7000点，2次資料約8,500点）あり，開館以後の受入れ件数は74件ある。これらのうち大半は，5年間の準備期間に収集されたものであるが，特に人文系の資料はほとんど寄贈寄託されたものである。このような状況のもとで館が成り立ち，さらに開館後も資料の収集は，人文系では寄贈・寄託という形をとるものが多いということは，ある意味では，地域の住民が博物館づくりの一翼を担っているものといえる。

このような性格を内包している資料を収蔵＝死蔵（資料が調査研究の対象となっても利用者に供されなければ死蔵に等しい）に終らせることなく，有効に活用していくという意味のもとで，博物館資料についての啓蒙，収

表 1

回	資 料	点数
1回 5.25～6.22	縄文・弥生式土器，義太夫用具，高札	68
2回 7.1～30	シャコ貝，ダルマ木型・製作工程	38
3回 8.1～29	背負梯，耕起用具，印袴天	23
4回 9.1～29	百万遍数珠，花菓子木型，写真	40
5回 10.1～30	鳥獸剥製，稲收穫・脱穀・調整具	19
6回 11.2～28	消防用具，火鉢・アンカ	26
7回 12.1～26	菓製品，お札	34
8回 1.5～30	シダ植物，婚礼用具	24
9回 2.1～27	縫織機，燈火用具	22
10回 3.1～30	村絵図，裁許絵図，三月節供飾り	18
11回 4.2～5.15	インパクトイト，五月節供飾り	25

集への協力の呼びかけを目的として，1階展示室の最後のコーナーを「寄贈品コーナー」とし，毎月展示替えを行なっている。

この目的は，地域博物館をめざす（館の性格付け・類型化をするなら地域博物館指向型といえる）という前提のもとに提示されたものである。「新収集資料の展示」という標題は，このコーナーの今後の方向性の一つを示すものであり，以下現況を紹介し，今後の課題について私見を述べてみたい。

寄贈品コーナー

上記のような目的のもとで，現在（昭和52年5月）までに表1のような展示を行なった。

図1は第3回目の展示設計図である。図のようにコーナーを3分または2分し，表のように資料にまとまりを持たせて展示している。5・6・7回，10・11回は，それぞれの季節・時期に応じて設計したものであり，6回は酒田の大火の直後であり，これを意識した。7回の菓製品は，この月に行なった「ぞうりを作ろう」という催物に対応し，菓製品をまとめた。5回の鳥獸剥製に対しては，死骸寄贈→剥製製作という資料の流れを明示し，収穫・脱穀・調整具は作業過程順に並べ，その中で足りない資料を示し，収集の協力を呼びかけた。2回のシャコ貝は，寄贈資料は1点であったが，これに採集資料のものをあわせ，シャコ貝のなかまとして展示した。4回の写真は，寄贈された写真資料をまとめ，写真も博物館資料となることを示した。9回の燈火用具は発達史的に展示し，館にない資料は写真パネルで補った。

以上が展示に際しての留意事項である。季節や社会の動きに呼应したり，資料化の手順や収集協力の呼びかけ，館行事との対応などが可能なのは，短期間で展示替えをすることによるが，このことは，常設展の流れの中に変化・刺激を与えているとも考えている。しかし，短期間の準備と少ない費用のもとで行なっているため，常

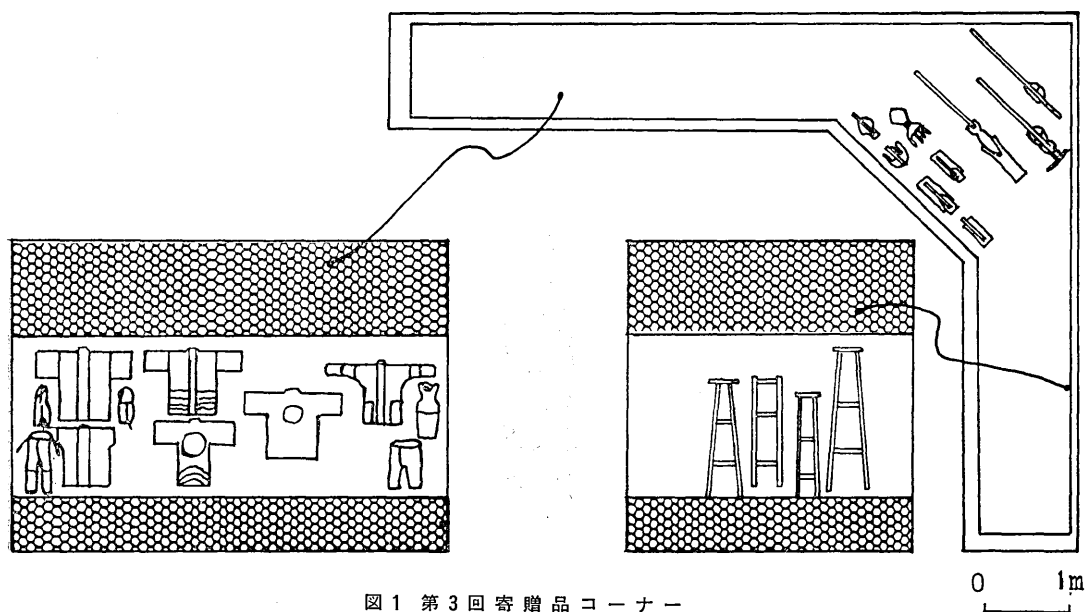


図1 第3回寄贈品コーナー

設展や特別展と異なり、学芸員の調査・研究の成果として結実したものではない。そのため、教育的配慮——ものひとつの結びつきを考える動機づけを目的とする常設展・特別展と同じ効果は期待できないと考えられる。このような見地から与えられた目的・留意点が先に述べたような点である。

目的と課題

準備室段階では、館建設の協力者と位置付けられる資料の寄贈者・寄託者、情報の提供者は、開館すれば展示を見、催物に参加する等の利用者ともなる。芹沢¹⁾は、こうした館の利用者を4つのレベルに分けたのであるが、館とすれば一方には協力者とされる人たちもある。そして、この利用者と協力者とは表裏一体の関係にある。協力者は利用者であり、利用者は一定の条件のもとに協力者となる。研究・専門といわれるレベルの人たちは、教育活動に参加するだけでなく、ボランティア・学芸員の補助者ともなる資質を備えており、そのような活動を通じて博物館に対する理解も得られる。こうなると単に利用者にはとどまらず博物館づくり(建設ではない)の協力者ともなる。また、特定の目的を持たずに博物館に来る人たちにとっても、博物館というものについて知ることができたなら、より効果的な利用ができよう。

「博物館行き」などという言葉であらわされる博物館の印象、収集時において時おり耳にする「こんなものも

資料になるのですか」という言葉は、如実に博物館に対する無理解を示している。しかし、これは利用者の責任とはいえず、博物館の責任に帰す所が大きいのである。新井²⁾のいう博物館の理解者コースは、決して大学だけの問題ではない。学芸員にものひとつの結びつきに関する教育学的研究が要求されるなら、この活動も行なわれる必要がある。

博物館の利用手引書(館活動の全体を網羅したもの)の出版や「博物館入門」的な講座も必要であるが、日常利用される展示でも、限界はあるが、博物館に対する啓蒙は可能であろう。つまり、先に述べた新収集資料の展示

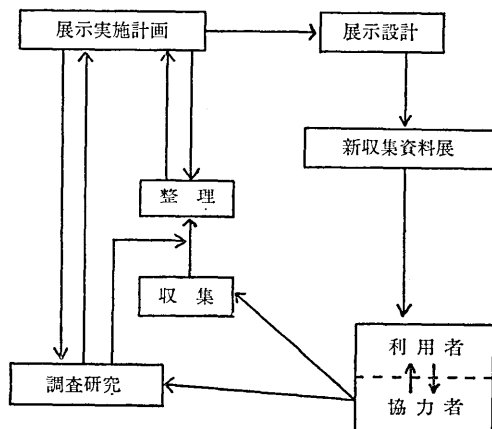


図 2

は、この辺に目的を据えることができるということである。社会情勢といったら大げさだが、このようなものへの対応や館での資料化のプロセス、収集協力の呼びかけは、博物館というものの性格をうちだす一つの手段となり得る。

以上、展示までの過程とそのねらいを図示してみると図-2 のようになる。

さて、それでは今後の課題であるが、先に述べたような新収集資料の展示の目的がどの程度まで可能か、必ずある限界はどこなのか。そして、その目的を達成するための具体的方法が課題である。具体的方途の1つとして、館内だけでなく、公民館などとの連携のもとでの展示を行ない、それと並行して調査をしたらなどと考えている。何を調べ、どう活用するかなど具体的に示したら、館活動の一端が身近かに、より生々しく感じられ、博物館について、言葉や活字よりもよりわかるのではないだろうか。

あとがき

以上述べてきたのは、勤務する博物館が開館して1年目にあたり、これまで担当してきた「寄贈品コーナー」をふりかえり、今後の方向についての試論を述べたものである。目的と課題は、館の方針をもとに筆者個人の考えを述べたものであり、多くの方々の御叱正を乞い、より効果的な方途を得たいと考えている。

(おがわ なおゆき 平塚市博物館)

※Hiratsuka City Museum

〔註〕

- 1) 芹沢俊介「自然史系中小博物館における教育活動の構成」『博物館学雑誌』1巻2号 p.2・3
- 2) 新井重三「博物館学講座の開設と問題点—埼玉大学の場合—」『博物館学雑誌』1巻2号 p.48